

## 霊の現代的概念に関する考察（壹）

仏教語の解説を用いた法話の可能性——その具体的展開について——

岡 野 忠 正

はしがき

小生はかつて、昭和六十一年度の教化特別研修生として「日常語中の仏教語に関する一考察」というテーマのもと、『ほとけ』という語について、その語源や用例の日本での歴史の変遷をたどってみた。その年度末の研修会の折に、「日本人のホトケに対する観念は、霊に対する観念と非常に接近している。その日本人独特の霊に対する考え方について、もう少し考察を進めてみてはどうか」という示唆を得た。

そこで今年度からの研究テーマに、「仏教語の解説を用いた法話の可能性」の具体的展開として、『霊』についての問題を取り上げることにした。

小序——問題点と課題——

今日の世相の中で、『霊』の存在についての話題が取り上げられる機会が多くなっている。それは「あたり」「さわり」といった《霊障》から、「こっくりさん」などのオカルト的な俗信に至るまで多種多様である。このような

状況を反映して、教化活動の現場ではこれらに対する質問・疑問が寄せられ、具体的な対応が切実に求められている。而るに、現状では宗派として、或いは教学上の観点から、現場の教師の指針となる明確な答えが用意されていないとはいえない。

智山伝法院の教化研究室では、教化活動の現場の声を取上げ、教化推進の課題を明らかにする試みとして、地方教化研究会を開催した。この地方教化研究会のテーマの一つとして「霊障にかかわる問題」が取り上げられた。ここの意見・考えを集約すると、①相談者の話を真剣に聞く態度、②そして相談者の不安を和らげるための修法・廻向の厳修、③さらに一度だけの相談・対応ではなく、正しい信仰へ導入するための対応が必要であるなどの三項が、ポイントとして提示された。

ところが研究会を反省してみると、具体的な事例や意見を交換するほどに、教師側の解答のバラツキや姿勢の違いなどの基盤の不明瞭さが問題として指摘された。勿論、その基盤とは真言教学に裏付けされたものであるべきであろうし、教師自身の信仰に基づくものに大きな荷重がかかっていることはいうまでもない。

#### (一) 小論の目的について

しかしながら、現代までの仏教の流れや日本人の特性の中から、霊というものに対する今日的な考え方を探ることはできないだろうか。

そこで小論では、インド的な人間観や霊の概念と仏教の立場、さらに中国の民間信仰や思想的特性、および日本人の生と死の観念を比較検討して、「仏教と日本独特の霊の観念とが、どのように関わってきたのか。またどのように関わっていくのか」ということにスポットを当てて考察を試みようと思う。

このテーマは思想の比較考察という意味では、けっして新しい試みではない。しかし、今日の「霊障にかかわる

問題」や「教化活動への一視点」という意味では、幾許かの意義を見出し出したいと思っている。

(二) 考察の方法について

以上の考察の方法として、次の三点を基軸に考えていきたい。

- ・ 第一章 人間存在の根拠、基盤について
- ・ 第二章 生命（いのち）の概念について
- ・ 第三章 霊と業との概念について

また、これらの考察の展開として次の問題提起が考えられる。

- ・ 第四章 引導法に於ける霊の問題
- ・ 第五章 十三仏と死後の関係（十三仏と廻向と即身成仏）
- ・ 第六章 霊の問題にどう取り組んでいくか

これらの結果として、霊と靈障の問題に関する参考文献の整理ができるものと考えている。

(三) 各章の問題点と課題について

まず第一章では、「人」というものをインド・中国・日本において、どのようにとらえたのかという問題について整理しておきたい。

古代インドにおいては、ブラフマン（梵）を大宇宙とし、人間存在の根源を小宇宙とするアートマン（我）が想定される。（アートマンは、呼吸する、あるいは動く、あるいは風が吹くなどを語源とし、氣息・靈魂・生命・自身・本質・我・最高我を意味する。——『梵和大辞典』

これに反して、無我説に立つ仏教は、アートマンを容認しなかった。しかし、行為の責任者、つまり輪廻の主体

については検討され、プトガラ、あるいは一味瀧などが想定された。

このような人間観の見直しには、どんな意味があったのか。

また、具象的に物事を判断し把握することをその思惟の特徴とする中国民族（≡漢民族）は、どのような「人」の概念を形成していたのであろうか。

それは例えば、「人」という文字は人体側身の象形であり（『説文』人、象臂脛之形。〔段注〕人以従生、貴於横生、故象其上臂下脛、また人は天命を受ける主体であると考えられた（『説文』人、天地之性最貴者也。『禮記』〔禮運篇〕人者、天地之徳、陰陽之交、鬼神之會、五行之秀氣也）。

これら二種の異なる人間観・人間存在の概念が相前後して入ってきた日本において、「ひと」はどのような存在として考えられていて、そして考え直されたのか。例えば、人と祖先神や祖霊とはどのような関わりをもっていたのか。

以上の問題を整理しながら、第二章として生命（いのち）の概念についても触れておきたい。

生命と漢訳された「プラーナ（呼吸・生氣）」の概念と、長生と富裕を目的とする中国の生命観や人生観との比較。そして、それらの古代日本の世界観（神話的世界や人生観）と生命観への影響、また何故「ミコト」の語に「命」の文字をあてたのかなど。これらがどのように関わり、またどのように影響しあってきたのか。今日に連なる問題としてとらえ直してみたい。

そして第三章では、一、二章の考察をもとに『霊』と『業』についての観念の変遷を辿ってみようと思う。

原始仏教から大乘仏教への流れの中で、霊と業とがどのような関連或いは対峙するものとして考えられたのか。先学の研究成果から学びたいと思っている。

また、古代中国における「尊き人の魂」としての霊の観念、そして陰陽思想の発達と道教思想に裏づけられた魂魄昇降と中元裁可の信仰。

これらが、日本人の死への恐怖やケガレの信仰、また祖先崇拜といったものとどんな関わりがあるのか。そしてそれらがいつ頃、日本人の意識の中で体系化されてきたのか（例えば、崇り・障りは一つの通過点または一つの説明手段にすぎない。その深層にあるのは、ムラの規範や地域の道徳の中で人間同士の葛藤である——『医療人間学』より）。さらには、その流れが現代社会の人々にどんな影をおとしているのだろうか。

さて、翻って我々仏教者、現代の習俗的な儀礼信仰の中で仏飯を食む者として、已上の考察を基に「十三仏信仰」「即身成仏」、そして霊障といったことについて問い直してみたいと思う。

日本の風土の中で培われた「日本的仏教」が、日本人の精神風景の中に何を育んできたのか。考えてみる良い機会であると思っている。